Charlotteその後の葛藤

つやら

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

題名の通りＣｈａｒｌｏｔｔｅのその後です。

連載で書きます、楽しんでくれたら本望です。

目　次

病院室での会話 ―― 1
退院 ―― 3

病院室での会話

「お帰りなさい。乙坂有宇くん」

　あれから1ヶ月、依然乙坂は記憶を取り戻さない。退院はもう少しかかるらしい。まだ補助なしでは上手に歩けない、リハビリが必要とのことだ。

「どうもでーす。有宇くん体調はいかがでっすか？」

「友利さん、毎日来てくれてありがとうございます」

　乙坂が入院してから、1日も欠かさず乙坂の病室に訪れては、話をしてたまに持って来てくれるお見舞いのお菓子やら、ＺＨＩＥＮＤのＣＤやらいろいろなものを持って来てくれるので、２人にとってかけがえのない時間となっている。

「だーかーらー、名前で呼んでください。それと敬語も禁止で！私たちは恋人同士なんですから。それも、あなたから告白して来たんですよ!?そして、出て行ってしまったんですからね？その辺自分の行動に責任とってくださいよ？」

「はは・・、こんな美人を射止めたなんて昔の僕はどんな人間だったんだろうな」

「卑怯で、クズでしたよ?!」

「うん、この前も聞いた・・」

　落ち込む乙坂。自分が昔はクズだったと言うことは、知らされていた。

「まあ、落ち込まなくてもいいと思いますがね、あなたは、私やお兄さんの組織の人のために1人で助けに来てくれたり、歩ちゃんのために助けてくれた、そんなの本当のクズにはできませんよ」

「歩を僕が失ったとき、立ち直るきっかけをくれたのは友利だって聞いたしそれに、友利を助けたのは俺じゃなくて兄さんの組織の人だろう？僕は何もできなかった」

　これまでの経緯は、聞かされている。僕が能力者を無くす為二年程旅をしていたことも・・

「ああ～、もう！それでもあなたがいなきゃ、歩ちゃんはこの世にいなかったし。私もここにいたかどうか・・。あなたはクズではありません、撤回します。それにクズだったら、二年も恋人の元から離れて能力者を助ける旅に出ないでしょう？」
「そう言ってもらえて助かる」
　ホットする乙坂、しかし友利が
「あ、でも恋人をほったらかしにしてたんだからクズなのか？」
「えー!!」
　また落ち込む乙坂。
「嘘です。私があなたに旅をして戻っきたら恋人になろうと言ったんです。あなたは、とても誠実で勇気のある人です」
「うん、ありがとう」
　その時、看護師さんが部屋に入ってきた。
「乙坂さん、血液検査と体温測ります」
　そう看護師さんが言うと、
「私はこの辺で、それじゃ有宇くん」
　今から友利は学校に行くので、退出する。
　部屋から出る前に友利が思い出したように、看護師に尋ねた。
「退院はいつぐらいになりそうですか？」
「まだはっきりは決まってないですけど、このままの状態で行けば、1ヶ月かからないと先生は言っていましたよ」
「そうですか、ありがとうございます。それではまた有宇くん」
　いつもありがとう友利」
　看護師が検査の準備を終えたようだ。
　今日も、リハビリを頑張ろうと思う乙坂であった。

退院

「来週には退院できるそうだ」
　おれは友利にそのように病室で告げた。
「そうでしたか、良かったです」
「あぁ、待たせてすまない」
　謝るおれ。
「いえいえ、よくここまで早く復活できるもんだなーと、感心しました。もしかして能力使いました?!」
「いやいや何にも覚えてないから！それに、どう能力を使っていいのかわかんないし」
「わかったら使う気でいたなー、この野郎！」
　ボコボコと乙坂を殴る友利。
「痛い！病人にすることじゃないよ！」
「確かにそーですね」
　拳を収める友利。
「でも、能力は絶対使わないでくださいね、あなたから納涼を見奪える能力者はいないんですから。そもそもあとすこし時間が経てばあなたの能力は消えるでしょうけど」
「うん、でもどんな能力が僕のなかにあるかはわからないから気をつけないと」
　そういう乙坂。
「でも早く、復活できるんなら能力使っちゃってたかも、早くみんなやそれに友利ともっと長くいたいし」
　そういう乙坂に友利が頬を染めた様子で、
「それならまぁーすこしはってダメですヨォォそんなこと！」
　また殴る友利。
「でも使い方わかんないし、それに友利が嫌なことはしないよ、絶対」
　怒った友利が機嫌を直して
「それじゃあ時間なのでまた明日きます」
「うんみんなによろしく」

すると友利は、
「あっ、しっかり勉強してくださいね」
「はは、善処します」
そうして帰って行く友利。
さっきの勉強のことだが、乙坂は星の海高校に復学することになった。乙坂兄の後ろ盾と生徒会の力があれば何ら可能なことだ。乙坂はちょうど旅に出てから2年で帰ってきたので2年遅れで復学できるのだ。もちろん一年からだが‥。そうこうあって友利がすこしでも楽にしてあげようと勉強を教えているのだが、これがさっぱりダメだ。もともと中学から勉強をしてないのに、今回の旅で脳までダメージくらっているので小学生レベルの頭だ。それをすこしでも楽にしてあげようと、せめて中学生ぐらいの学力にしてあげようと友利が頑張って勉強を教えているのだが特に数学がダメだ‥。高校では特別日程を組んでくれるもののでもすこしは、いやけっこう頑張らねばやばいな、という感じである。頑張らねばと心に決めている乙坂だがどうなることか。

退院当日（休日）

「有お兄ちゃんおめでとーなのですー！」
休日ということもあって歩みが友利と来てくれた。
「おう、！ありがとうな」
「有くんどのくらい片付け済みましたか？」
そういう友利に
「あとすこしだ。」
と答える。乙坂。
「では手伝いましょう」
「歩も手伝うのですー」
そして3人で片付け、病院を後にした。
バスで帰ってる途中に、乙坂が
「そういえば高城とか黒羽はどうした？」
そういう乙坂に友利が

「あっ、退院の日くらい来てもいいのにとかおもってます？」
「いやいやそんなことは思ってないけど、あまり顔見せないから。ほらまだおれ、携帯持ってないし」
そういう乙坂に友利が
「またまたー、そんなことは言ってほんとは悲しいくせに！」
すると歩が
「有お兄ちゃんはそんなんじゃないもん、ただ少しさみしくなってるだけだもんね！」
《全然フォローになってねぇ・・》
そう思う友利と乙坂。
乙坂の隣でクスクス友利が笑ってる。
〈この女！蹴飛ばしてやりてぇ〉
そう思う乙坂であった。